映画

石井輝男監督作品

つげ義春原作　浅野忠信主演

# 1968年、その漫画は生まれた。そして30年たった今、その漫画はついに完全映像化された。

7月18日(土)より 東京●BOX東中野●ユーロスペース 大阪●扇町ミュージアムスクエア にてロードショー

# 別離、もっきり屋の少女、やなぎ屋主人、ねじ式を一つに…

■つげ義春作品を愛する石井輝男監督の念願の企画であった「ねじ式」がついにスクリーン初登場。

■「ねじ式」は今から三十年前一九六八年、ガロ増刊誌上に発表された漫画の枠を越えた漫画で、当時数多くの話題を生み出した。そして、さまざまな表言者に多大な影響を与えた。

■今回初めて映画化される『ねじ式』は「別離」「もっきり屋の少女」「やなぎ屋主人」「ねじ式」の四つの原作を見事一つの作品として構成映像化。前作『ゲンセンカン主人』のような完全なオムニバス映画とは違ったものとなっている。

■この映画の主人公は、つげ義春の分身ともいえる、若く、さえない漫画家ツベ。それを演じるのは浅野忠信。浅野の脱力的演技に加え、淡々と語るセリフまわしは見事に『ねじ式』ワールドと一体化。石井・浅野コンビ、ここに結実。

# ねじ式

●キャスト●

ツベ……………………浅野忠信
国子……………………藤谷美紀
看護婦…………………藤森夕子
木本……………………金山一彦
チヨジ…………………つぐみ
やなぎ屋の娘…………藤田むつみ
女医……………………水木　薫
ヌードの女……………青葉みか
もっきり屋の客………杉作J太郎
駅員……………………砂塚秀夫
金太郎飴売り…………清川虹子（特別出演）
家主……………………丹波哲郎

## その物語は、内縁の妻との切なく情けない別れに始まる。

売れない漫画家のツベ（浅野忠信）と、なんとなく一緒に暮らしていた国子（藤谷美紀・写真右頁最上段）。どん底生活の末、二人はアパートを追い出される。国子は会社の寮のまかない婦として住み込みをし、一文無しのツベは、かつて住んでいた大平荘の木本（金山一彦）の所に転がり込む。

頼る術なく訪れた国子のいる寮でツベが見た光景は、昔の片思いの相手である男の腕にぶら下がり、楽しそうにしている国子の姿であった。

夢か回想か、ツベは山里を訪れる。そこで居酒屋もっきり屋で働く少女チヨジ（つぐみ・写真右頁二段目他）と出会う。何もしてくれないと張り合いがないと、手を握り胸元に引き寄せるチヨジに狼狽するツベ。悪酔いしたツベは奥の部屋で眠り込む。「頑張れチヨジ。頑張れチヨジ」飲み客の声が聞こえる。赤い靴ほしさに客（杉作J太郎・写真右頁最下段）に胸をさわらせるチヨジの姿を障子の隙間から見てしまう。

ふと目覚めると国子を腕枕していた（写真右頁最上段）。ある夜、ツベは公園で国子の妊娠を知る。相手は以前アルバイト先の貸本屋に来ていた客だという。愕然とするツベは別れを決意。絶望の中自殺をはかるツベだが、一命をひろう。心配する家主（丹波哲郎・写真最上段）と看護婦（藤森夕子・写真最上段）。

その後のツベは、ヌードスタジオの女（青葉みか・写真二段目）の所に入り浸る。階下から流れる網走番外地を聴いて房総行きの列車に飛び乗る。着いた海辺の町、ツベは大衆食堂やなぎ屋に一泊することにした。そして、やなぎ屋の独身娘（藤田むつみ・写真三段目）のしぐさに妄想を膨らませる。一年後再び、やなぎ屋を訪れるのだが。

# メメクラゲに噛まれたツベは医者を捜す。

やなぎ屋をあとにしたツベは、海辺にやってきた。そして、ふと海の方に目をやると、男が海からあがってくるのが見えた。その男は、メメクラゲに左腕を噛まれたツベであった。

メメクラゲによって切断された静脈の切り口を右手で押さえながら、不案内な漁村で医者を捜すツベ（写真右上）。

ちょうど運良くやってきた機関車に乗せてもらい、医者を捜そうとするツベ。狐面の少年（写真左上）が運転する機関車は先へ進んでいるかと思いきや、もといた場所に戻ってきてしまう。機関車を降りたツベは、村をさまようが目医者しか見つからない。

途中、金太郎飴売りの老婆（清川虹子・写真右下）と出会い、やっと医者に巡り会うことができたのだが。その女医（水木薫・写真左下）は産婦人科医であった。女医とのお医者さんごっこの末、ツベは○×方式を応用した《ねじ》を左腕に取りつけてもらう。

●八五分があっという間にすぎてしまう映画「ねじ式」は東京、大阪を皮切りに全国公開予定。お問い合せはビターズ・エンド☎〇三（三四六二）〇三四五まで。

## 読者プレゼント

●昨年冬に発売以来大人気爆走中のゼンマイ歩行の「ねじ式」（写真左）。今度は劇場公開記念モデルが登場（写真右）。ボディーが青いのは蓄光素材のため。この記念モデルは全国公開劇場で販売。今回、メディコム・トイのご好意により、この「ねじ式」人形を各10名様にプレゼント。黒パンか赤パンかを明記、編集部まで。締切7月末日。当選者の発表は商品の発送をもって代えさせて頂きます。

©つげ義春●対象年齢6歳以上●予価980円●7月中旬発売
●問い合わせ▶1/6計画：03-3467-7676

企画構成●本誌編集部　写真●岡本真菜子　協力●ビターズ・エンド

# 石井輝男監督

映画『ねじ式』インタビュー。

若いスタッフのエネルギーが作りだした今回の映画『ねじ式』。同世代の若い人たちの反応を知りたい!!

石井輝男フロフィール●1924年、東京・麹町生まれ。映画監督。日本映画の表街道と裏街道を自在に走る、奇才・鬼才。ヒーローものの　鋼鉄の巨人(スーハー・シャイアンツ)　から、大ヒットとなった高倉健主演の　網走番外地　シリーズ、異常性愛路線の　恐怖奇形人間　、千葉真一主演の　直撃地獄拳・大逆転　まで代表作多数。近作に、93年公開のつげ義春原作　ゲンセンカン主人　、95年公開のつげ忠男原作　無頼平野　かある。

石井輝男監督情報……BOX東中野にて《石井輝男ワールド》を上映。7／4〜7／10は『ゲンセンカン主人』、7／11〜7／17は『無頼平野』。連日、夜9：10より1回上映。問い合わせはBOX東中野（03-5389-6780）まで。

# ともかくね、突っ走って作っちゃう以外ないなあって…。

——映画『ねじ式』の完成、おめでとうございます。試写を拝見しました。石井監督の手応えはいかがですか。

石井：「できる範囲のことはやりました。若手の人たちがよくやってくれたんで、一つでもいいところがあれば彼らのおかげだと思います。主演の浅野（忠信）君が、非常にノッてくれて、自分なりによくつかんでくれてね、良かったなあと」

——この映画の見どころは、どのあたりにあるといえそうですか。

石井：「いや、全部ですね」

——では逆に、見落として欲しくないところはありますか。

石井：「それを僕がぐちゃぐちゃ言うよりも、先入観なしに、ぽんと観ていただくことですね。よく（映画を）解説する人がいるんですけどね、解説しちゃうなら作らなくてもいいと思います。何があろうと自分の責任だし、どう言われようと仕方がない。俎の上の鯉ですか。

　ただ、一人でも多く観に来てくれればというのが（偽らざる）心情ですね。つげさんのファンはご覧になると思うんです。あんまり宣伝しなくてもね。

　つげファンはきっと〈厳しい〉と思います。というのは、一人ひとりがそれぞれの『ねじ式』を持ってますからね、だから僕がどうジタバタしようが、ある人は褒めてくれ、ある人はもう絶対拒否ね。

　そうではなくて、つげ義春って誰、『ねじ式』って何という人たちが、まあ、主として若い人たちですが、どういうふうに反応してくれるかが、今回の一番の課題じゃないかなと思っているんです。

　ともかくね、突っ走って作っちゃう以外ないなあって、無我夢中でやっちゃった。若いスタッフたちがすごくノッてくれたから、現場が楽しかった。そういうことは画面に反映するものだと思っていますから、きっと、スタッフの年齢層の人たちは、（映画を観れば）なんか感じてくれるんじゃないかな」

——現場の若いスタッフ（大学生ほか）たちに関しては、どのようにお感じになりましたか。

石井：「良かったですよ。若い人は何か交渉する時でも歩いてないですよ。車降りたら相手の家まで駆け足で行ってる。だからスピードが違う。情熱ね、すべて違いますね。彼らが、その初心を失わないでずうっと続いてくれれば、映画界もうんと変わるでしょう」

——ロケに同行させて頂きましたが、確かに若々しく心地よい緊張感がありました。

石井：「心地よいものなんですよ（笑）。なんか三日やるとやめらんなくなる（笑）というのが映画界ですから。面白いはずなんですよね。……僕は、若い人はいいなと思いましたね。ますます若い人好きになってね。若い人と一緒にいると〈気〉をもらって、こっちも若返る、知らず知らずのうちにね」

——映画の『ねじ式』は、つげ義春さんの短編マンガ『別離』『もっきり屋の少女』『やなぎ屋主人』『ねじ式』の四編から成り立っています。マンガ『ねじ式』だけで一本撮ろうというお考えはなかったのでしょうか。

石井：「これはなかったですね。できるだけ、それ（原作）を壊さないように（した結果です）。『ねじ式』だけに限らないんですけど、つげさんの（短編）は、絞りに絞ってエッセンスだけが並んでる作品ですからね。さもなきゃつげさんは長編なら長編で描くと思うんですよ。そうじゃないのは、削って削って、削ってここまで出してるって自信できっとやってらっしゃる（からだ）と思うんです。

　ところがシナリオライターは、（原作）そのまんまだったりするとね、なんか手を加えていないと、いただけないような感じになるんでしょうか。『オレはこれだ！』みたいに、〈自分〉が出て来るんですね。するともう原作を刺身のつまにして、〈自分〉なんですね。僕は違うんです。だったら最初から原作使わないで自分（のオリジナル）でしなさいと。すると『できない』と言う。他人様の名前だけ利用してそれはないでしょう。

　現場で撮っている時、そういうふうに原作を尊重しながらも、やむにやまれぬものとかね、やってるうちになんか生まれてね、どうしてもって時がそりゃありますけどね。極力暴走しないように自戒しながらやっててもやっぱりいっちゃう、ところもありますよね。

　ただ最初から（原作を）壊しちゃってね、違ったもの作るってスタイルは、僕は詐欺的だと思ってます。作家に対して、原作に対して大変失礼だと」

▲もっきり屋ロケにて

――『ねじ式』を普通に映像化するとあれだけの尺（長さ）にはならない？

石井：「なりませんねえ(笑)。『ねじ式』だけで構成するとなると、シナリオライターは大変でしょうね、苦しむし、それからとんでもなくつまらないものができると思うんですよ。ああいう特殊なイメージが1時間半続いたら、もうお客さんもフラフラになるし」

# わざと説明不足にしているところもありますしね…。

――まず『ねじ式』ありき、と。

石井：「そうなんです。それは当然そうなんですよ」

――他の三作品を選ばれたポイントは？

石井：「意外とみんなが読んでないつげ作品ってのがあるんですよね。それが映画『ゲンセンカン主人』の場合は『池袋百点会』の話。読んでおもしろかったしね。ああ、みんな何でこれノらないのかなあ、じゃあちょっと紹介してみようかと。今度の『別離』もそうでね、つげ義春で『別離』って、誰も言わないんですよ。やっぱり『無能の人』や『石を売る』になっちゃうでしょ。

　で、『もっきり屋』はあまりにも有名ですからね。好きでもあるし、当然入ってきた」

――そして『やなぎ屋主人』が入って一本に。

石井：「つげ義春若かりし頃の青春編だという感じでね、やっちゃったわけなんですよねえ」

――四話オムニバスの映画『ゲンセンカン主人』に比べると、映画『ねじ式』はひとつながりの作品と見えますね。

石井：「そういうふうにしたつもりなんですけど、ガクンガクンとは来ると思うんですよ。わざと説明不足にしているところもありますしね。観客がどのくらいとまどうのか、とまどわないでシーン・シーンでついてきてくれるのか、そこらはもう実験的ですから、わからないんですけど。オーソドックスな人はみんなね、いわゆる評論家含めてね、怒るでしょうけど、そんなことはどうでもいいやって」

――今回は〈石井色〉はどのように出せましたか。

石井：「『色』は別にしてね、ともかく制約されなかったわけですね、（製作も担当したので）自分がお山の大将だから。精神的にはとても自由でした。まあ、これがたまんない味だなあと。映画『ゲンセンカン主人』の場合はとにかく『ゲンセンカン』、僕好みの話だったんでね。あれが本命で、それに『ねじ』を組み合わせてダーンと行きたかった（結局当時『ねじ式』の撮影は行われなかった）。前回の『池袋百点会』、ああいうタッチの写真って、僕アクション監督って言われてたから、ないんですよ。だから自分の、やらせてもらえなかった願望があそこに入ったっていうことはあるんです。で、今回もね、『池袋百点会』に近いのが『別離』ですよね。ちっとも難しくない、誰でもわかっちゃうという感じですよね。

　まあそれを一話（目に相当する部分）に持ってきたっていうのは、いろんな方が見に来るけど、ともかく第一話からつまづいちゃってね、もう入ってこられないっていうのは困るから。すんなりと、オーソドックスに見ていただいて、それから、『ねじ』を見せたいと。で、『ねじ』で冒険してね、さっぱりわからない（場合でも）、まあ一話ならわかったからね、料金の三分の一は取り返したということで勘弁してくださいってのが、本音ですね」

# CGとわかればそれ以上は面白くない。手作りの方がいい。

――『ねじ式』では登場人物の傷口といった特殊メイクのほか、特殊撮影も行われていますね。

石井：「若い人たちとワイワイやりながらね、コンピュータ・グラフィック（CG）を使用してリアルなシーンを作ってみた場合の、観客のリアクションなんてことを、ちょっと考えたんですよ。正確にうまくできていて、どうやって撮ったんでしょうみたいなことが可能なCGと、もっとチャチっぽくてもね、なんか手作りのあったかさのあるもののほうと、どっちがいいと思うって若い人たちに聞いてみた。すると最初からCGにはノってなかったんですよ。CGとわかればそれ以上はおもしろくない、手作りの方がいいと思います、と。これには僕も驚いて、力を得ちゃってね。だけど（若い人たちは、CGに代えて）どういうテクニックでやるのかは、素人だからわからない。（女医のシーンで、遠くの海上の軍艦が大砲を撃つなどの）特撮はこうやりたいなあ、とアイディアを出したら、ゲラゲラ笑ってねえ。僕が冗談言ってると思ったらしく、こっちはもうマジで言ってるのに向こうは信用しない(笑)。それで初めて撮影現場で、いや本気らしいぞってことになってきてねえ(笑)。東映撮影所行ってセットで撮る。カメラ覗いている人はともかく、みんな自分の担当だけで精一杯ですから。で、(編集されたフィルムが）上がってきて初めてね、うわ、なるほどって（スタッフ誰もが驚いた)。

――映画の冒頭、海辺での「アスベスト館」による暗黒舞踏のシーンがあり、私は〈石井色〉を感じましたが、反響はどうでしたか。

石井：「若い人たちに今回の映画を見せて、悪口書けって言った時に、おもしろいのがね、あの暗黒舞踏が、ほとんどこれが例外なしにノリですよ。ノリ線ですよ全部。もっと見せろ、もっとつなげって書いてありますよ」

――本誌の映画撮影レポートでも書かせていただきましたが、『ねじ式』の汽車のシーンでは、ミニチュアも使用されていました。このあたりがCGでなく、手作りのあたたかさを採った部分と考えてよいでしょうか。

石井：「ええ。それと『(若い人たちに）やられたっ』と感じたのが、例の汽車のシーンですね。『ねじ式』で汽車が出発して村に戻るけど(話の上で)、戻り方が説明的なんですね。若い人は、いつの間にか元の村に戻っている方がいいという。（ただし、前後のシーンをそのまま）つなぐとこう進行してたのが突如セリフだけになっちゃうんですよ。いつの間にか戻ってた、っていう本（原作）の感じをそのままビビッドに出すのは今の僕の演出技術じゃちょっとできないなあと。こりゃ参ったなあという感じで、若い人に脱帽でね」

――私はあの戻り方は新しい解釈だと思ってウケていたんですが。若い人は理屈抜きのほうがいいのかもしれませんね。

石井：「起承転結や伏線といった説明が嫌いらしい。だからこうショックがいいんですね。ちょっと違うかも知れないけど、この世の中はどうなっているんだろう、なぜ生きているんだろうとか、難解なものに挑戦していくみたいなことが、若い人にはあるんですね。だからわかりきったことは嫌なのかなあ。全部とは言わないんですけどね。どうもそういう傾向はあるように、僕は探ってんですけどね」

――それは石井監督ご自身のことのように思えますが(笑)。

石井：「いや、そうかもしれないんですけども(笑)。ええ」

（98年5月26日、調布の石井監督邸にて収録）

▲監督の自宅にて

●インタビュー／斎藤宣彦 ●写真／斎藤宣彦／藤井智聡／岡本真菜子